



# 学校だより

墨田区立第三吾孺小学校

校長 川中子登志雄

令和3年10月1日

10月号

## ◆◆◆ 覚 悟 ◆◆◆

校長 川中子登志雄



9月17日・5年生算数研究授業にて

子育てに正解はありません。

人は、自分に子供が生まれて初めて「親」となるので、親はどうあるべきか、何をすべきかについては、実は誰もよく知らないのです。せいぜい、自分の親が自分を育てるときにどうだったかを思い出すことくらいしかできないでしょう。それでも、自分の親が何を考え、どうやって自分を育てたのかも、本当のところはよく分からないのではないのでしょうか。

子供は過ちをおかすものです。それも、突拍子もない、信じがたいものであることがよくあります。ですから、子供の失敗を伝えられたときの親の第一声は、たいていの場合、「まさか。うちの子に限って…」となるわけです。

親は自分の子供のことを、何でもよく分かっていると思っていますが、小学生にもなれば、子供が親の前で見せている顔がその子のすべてではありません。私にも四人の子供がいますが、学校の参観日に見に行ってみると、私の知っている娘とは別人の姿を見て驚かされたことがあります。また、以前、放課後の児童館を訪れたとき、いつも学校で見ている子供たちとはまったく異なるワイルドな様子を見て、子供たちは場によって上手に態度を使い分けているのだなと感心させられました。

子供が失敗してしまったとき、親はどうすればよいのでしょうか。

親が失敗した子供に「そんなことしたの?」と聞くと、子供は大抵「してない」とか「ちょっとだけ」と言って、本当のことは言いません。なぜでしょうか。それは、子供は自分で悪いことをしたという自覚があり、それが自分の愛する親を悲しませることにもよく分かっているからです。

私が中学1年生の頃、スーパーカーブームというのがありました。あるとき、確か浜松町からモノレールに乗ったかの、遠い展示場で「スーパーカーショー」という催しが行われました。私は弟や何人かの友だちと、カメラを持ってはるばる出かけました。当時の私にしてみれば、それは大冒険でした。限られた小遣いの中から、電車賃とチケット代を出してまでして、何としても見に行きたかったのだと思います。カメラには、今と違って、高価な、カラーフィルムが入っていました。

会場は、まるで満員電車のような混みようで、ゆっくりと見ているどころではありませんでしたが、それまで写真でしか見たことのない名車の数々を目の当たりにして、興奮の中、あっという間にフィルムを使い切ってしまいました。

まだ、撮っていない車がたくさんありました。せっかくの機会です。財布を確認して、悩みに悩んだ末、会場で通常の倍近い値段に設定されたフィルムを買うことにしました。フィルム売り場もものすごい人だかりで、やっとの思いでフィルムをつかんだものの、なかなかレジまでたどり着けません。押し合いへし合いの大混雑の中、私は弟を連れて、ようやく支払いをすませました。そのまま、もみくちゃにされて会場まで戻ってきたら、何と弟もフィルムを手にはしていたのです。ダメじゃないか、と言ったものの、私は、あれだけの混雑の中を戻しに行くのもうんざりだし、高かったし、間違えて持ってきてしまったのだから、仕方ないと勝手な判断をし、そのままもらってしまうことにしました。

その後、自分で買ったフィルムだけ使い切り、一巡したところで家に帰りました。電車を乗り継いで、夕方に家にたどり着くと、家では母が夕飯の支度をしていました。ああ、無事に帰ってきたね、どうだった、と声をかけられたとき、私たちは持ってきってしまったフィルムのことを後ろめたく思っていたのでしょうか。母にはすぐにばれてしまいました。

子供たちから事情を聞いた母は、とても厳しい表情でした。そして即座に、「お金を払いに行くよ。」とだけ言って、夕飯の

支度をやめ、財布一つ手に、私たちを連れて家を出ました。私たちは、「あんなに遠いところまで、今から行っても間に合わないから…」と言って、ベソをかきながら母を止めようとしたのですが、母はそれには応えずどんどん行ってしまいました。仕方なく私たちも、自分たちのしたことを心から悔やみながらついていきました。閉館時間には間に合わないだろうと思っていましたが、寸前に会場に滑り込みました。売店のあるところまでまっすぐに行き、母は、もう片付けを始めていた店員に事情を話して、謝罪をし、フィルムの料金を支払いました。アルバイトであろう店員は、それはわざわざどうも、と戸惑った表情をしていました。

また、電車に乗って、3人で家に帰りました。母は、電車の中でも、家に帰ってから何も言いませんでした。それで十分でした。

今にして思えば、あのときの電車賃を含めた出費は、当時の我が家には大きな痛手だったでしょう。それでも母は即座に覚悟を決め、全存在をかけて、行動で、子供たちに善悪を教えたのです。あのとき、もし母が、「ダメでしょう。なんてことしたの！ …でも、もう、そんな遠くの事じゃ、仕様がな。」と言っていたら、その後私たち兄弟は、「まあ、仕様がな。」と言って、悪いことをしても平気な人間になっていたことでしょう。

子供はたいていの場合、善悪の判断はできるのです。それでも、その判断に基づく正しい行動ができるかどうかは、結局のところ、自分を愛してくれる人を思う気持ちの強さによります。悪いことをしたときに、親が子供を折檻したり、こんこんとお説教を繰り返したりしても、それは所詮、親の自己満足に過ぎません。「これをしたら、親が悲しむ。」「これをしたら、親に迷惑をかける。」親にできるのは、子供がそう思えるように、ふんだんに愛情をかけること。そして、子供が失敗してしまったときには、子供の代わりに、迷惑をかけた相手に心からの謝罪をして、今後同じ過ちを繰り返さないように責任をもって子育てをしますと誓う無様な姿を子供に見せることです。

それは、親として、最後まで子供を信じ切る「覚悟」を見せることにほかなりません。



### ◆◆◆タブレット端末の一斉回収について◆◆◆

ICT 担当

10月11日(月)～16日(土)の期間にシステム更新があるため、タブレットを学校で回収します。その期間も授業での活用は行っていきますのでご安心ください。詳細につきましては、後日、あらためてご連絡いたします。

### ◆◆◆お知らせ◆◆◆

本校の事務職員として5年半勤務された鈴木 敦子さんは、この度、区立小中学校事務の共同実施に伴い、10月1日から吾嬭第二中学校共同事務室に異動することとなりました。なお、今後、本校の事務については、4月より着任している岸本 和美さんが窓口となります。ご承知おきください。